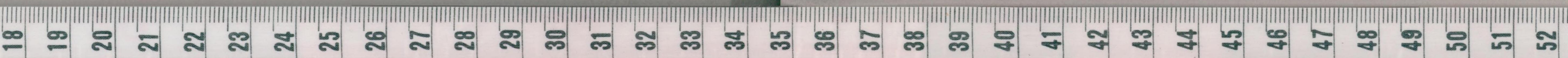
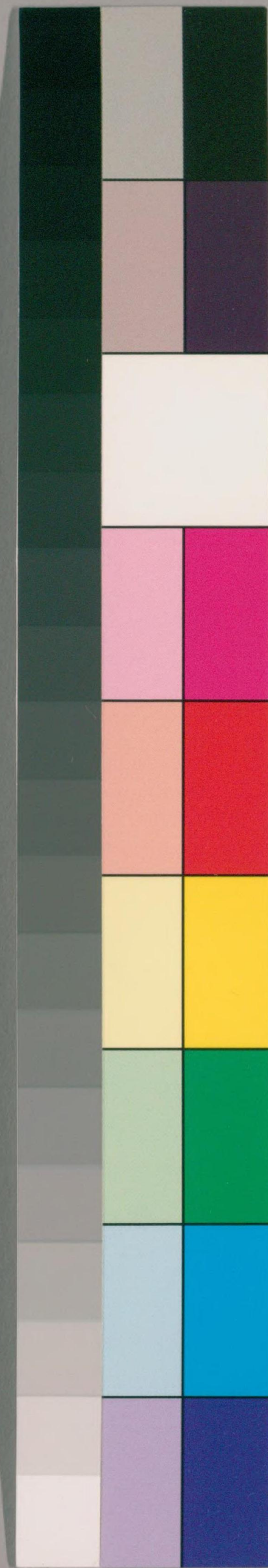


法
立正安國論
全

188.9

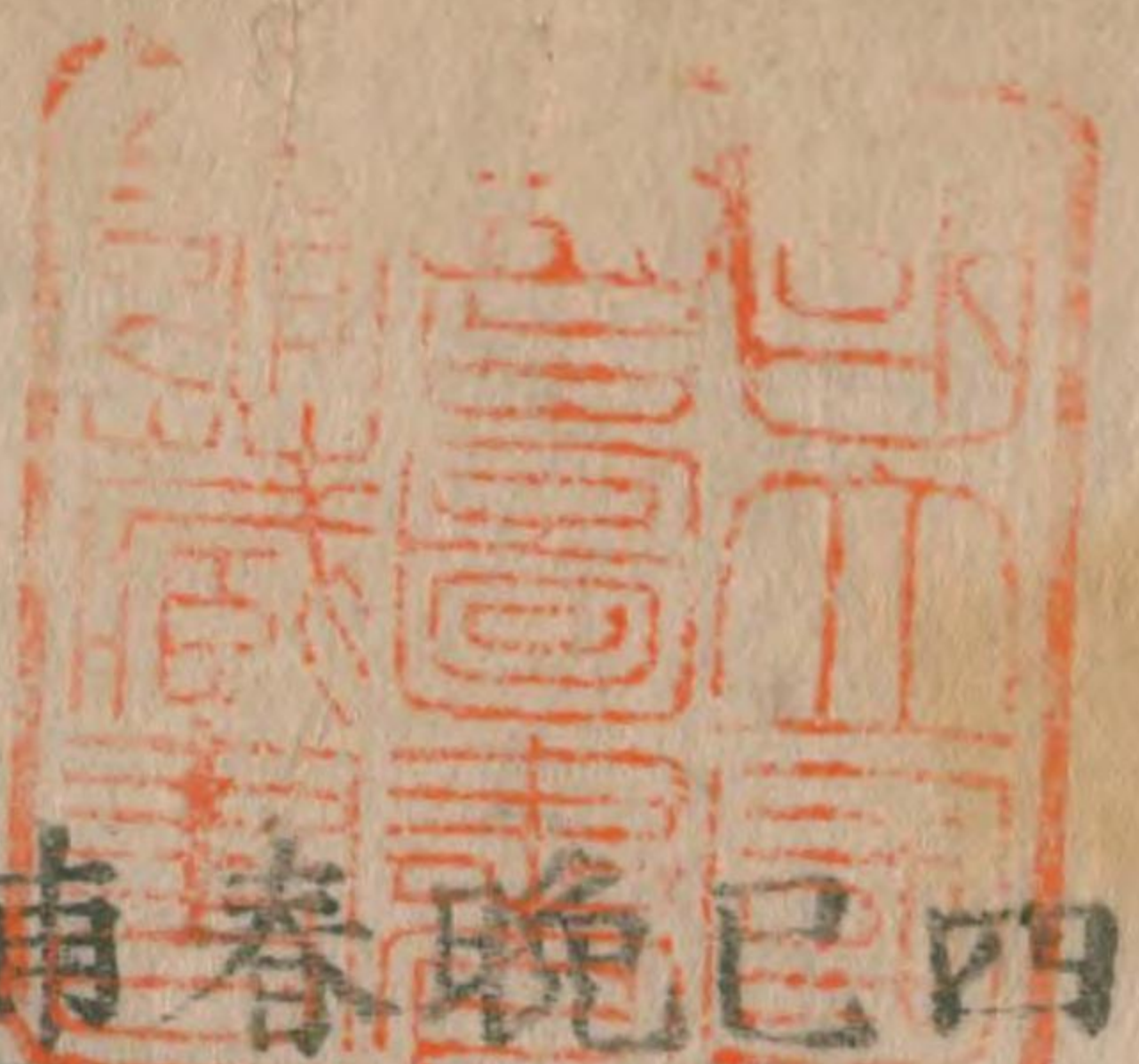
N862r



国立国会図書館 タイトル『立正安国論』 請求記号 188.9-N862r

ガラス使用

大保四巳晚春補別



日蓮大菩薩御書

平評
里番
火所

法立正安國論



東都書肆

平樂寺
華陽堂
梓

立正安國論



扶桑真人謹序

夫是安國論の書は日蓮諫國の忠書本朝を双明後也
人皇八十九代龜山の院の御宇文敏元庚申七月十六日鎌倉
將軍崇光親王の執權副元帥小條相模守平時於入道
宿願を全吾光則入道と以て是を進見するの御涼雲は月
と云ふべきは後者の爲に披え入道と存て罪と爲て
伊豆の島に配せらるる二年にして弾容ありと云ふは後者
殺りて斬罪を志せしれんと云ふは佛神擁護者て就は解
りて之を流し佐州に遷せらるる也又死罪ありと云
鎌倉に還入を乞ふは保てて退くは賢者たるべき也とて終

立正安國論

244977



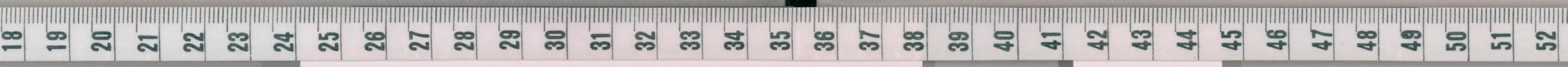
甲州身延の嶽よりつう九年以経て弘安八壬午年十月十二日
武州池上に於て遷化し後身是も皇相五百年に及ぶと
し其書世に流布せし唯其名字其書のこまを以て後人
物湊まるるの希也其由も考りて或は書紙字んく
爲に納め管に以て物見知もさる或は又は眞字字
と以て考人容易に湊るのあはざる若し余湊る是は歎き
刑点と舟國字とほし男女紙を湊りて志めん多欲に
後人是を物湊して伝とおし傳法をやめば天のあはれ
庶人よめる字んく身延とある家とらるの玉紙治め天下泰
平の終とるんく論文は洋るる後若國字もる紙紙を
物湊して隨筆の業紙得ることるん

立正安國論



後客來て嘆て曰く近年より近日より天變地変
飢饉疫癘遍く天下に滿廣く地上に逆り牛馬巷におれ
骸骨路よこりて死を振くの業既も大いにこころを
かゝるまざるの族敵て一人もなむ能るる利刃即是の文紙
考らば西古史の各所とる或は元病患除の死とこの
東方如來の經を備へ或は病即消滅不老不死の河紙
作て法苑眞實の妙文とあがり或は七難即滅七福即生の
句を去んとて百座百講のよそをひを洞へ或は秘密法云の
教よつて入瓶の水紙そぎ或は坐像入定の儀を金して

立正安國論



空觀の月を洗一着ハ七鬼神の号と書て子門よおし着ハ
ふ大力の形と急ぐいて万戸よりけ着ハ天神地祇と相して
に角に樓の崇祀とくはて着ハ万民百姓阿あはきんで玉
主國宰の徳政を以てまうと之を唯肝胆にこいて以
飢瘦よせられを客目おあれ死人眼よみてう屍を以
してりとなし尸とあつて橋とるを天竺んれを
二離聲と合せ入緯珠とつらぬと寶世にいまして
百王いまご究まらむとせ世をやくもかとりふそ法何んぞ
をさるや是いつれの猶より是あんの徳よるや
主人の曰く猶けりて愁て胸臆憤愧を客來
てた小嘆む志づく流俗といささん史家以て道不

る者ハ法よらて佛と称するやう志多に今神術も
うまごの佛威も驗る一ともし尚世のていらくをえ
りて惡にして後生のうごひと發せ猶まば則ちを復
と作て恨との方裁と俯して慮とふふを清激
爰と傾て祈經文といふくふ世皆ふ不肖死人悪く
惡よ復せ故よ善行の玉と捨ておさう聖人の所行
辭してくらげ是ともつて魔來り鬼來り灾死り
難おらるいごもんハ有るべし恐れもんハあまらるる客の曰
天下の灾水申の難余猶嘆よあは流皆かありり
今蘭室にいつて初て芳洞と承り小神聖を辭し
灾難るるび犯るいづれの経おわらやを後按をきん



至人の曰く其文繁多を能く弘く持たるる金光明經不
 云くを國古より於てけ経ありとてたいていすごうて流
 布せむを捨離の心と生じし礎やと縁がらむ亦供養
 守守し後致せむに於の能持經の人をえても
 中しく守守し一かふし供養するもあつて遂
 我ホおよび餘のいんぞくをその徳天としてけ基
 此の妙法をすくむを得ざるしむ耳務味に背に
 正法のまがれとてあつて威光及びもちひ努力ある
 るし一悪趣と増長し人天と損減し生死の河に
 墜て涅槃の路ふそむん世尊我ホにまゐるび徳
 の眷属及びや志や等形の如くのりてんて其國

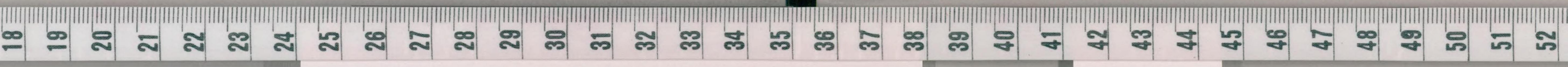
古と捨て擁護の心あるん但我ホ是王に捨棄するの心
 あらば亦を帝の公主と守護する徳天吾神も皆悉く捨
 去りあらん既し捨離しれりあつて必す此に後くの
 災禍あらず國位と喪失し一切の人流皆言ふく唯彼
 殺害し瞋障のこあつてまに相殘し縮短して法を
 むきにおよばさん疫病流行し慧星あはく出てあ日あり
 況し落蝕つひ多く黒白虹ふ祥の相とあつて星流れ
 地動いて井の内より夢をさるし暴風魚風時節によう
 者不飢饉よせんで苗實もみのりむ多く地方に怨賊あ
 つて國內を侵掠し人民法の苦悩と交て去地ふたのしむ
 つまのふあることなりん已上大集經云く佛法實に強設せば

立正安国論



須臾^{すゑん}凡^{たゞ}皆^{みな}長^{なが}く^も法^{はふ}法^{はふ}も亦^{また}忘^{わす}れ^るせ^ん時^{とき}に^あら^うて^は虚^こ空^{くう}の
中^{なか}に^あら^うる^も考^{こう}あ^つて^は地^ちと^震ひ^し一切^{いっせ}皆^{みな}あ^まり^く知^ちて^は粒^{つぶ}
を^あ上^う極^{ごく}の^ゆく^ららん^城壁^{へき}破^{やぶ}れ^落下^おり^屋宇^う悉^{しつ}く^ひ日^ひれ
さ^けて^は樹^{じゆ}林^{りん}根^{こん}枝^し葉^{えふ}葉^{えふ}菜^{さい}菜^{さい}も^盡る^ん唯^{ただ}淨^{じやう}居^く天^{てん}と
除^{のぞ}て^は欲^{よく}界^{がい}の^い切^{せつ}の^ま七^{しち}味^{まい}之^の精^{せい}の^き損^{そん}減^{げん}して^あす^りあ^る
る^も凡^{たゞ}解^げ脱^{だつ}の^法吾^ご倫^{りん}も^時あ^らう^て一^{いっ}切^{せつ}つ^まん^せん^を
る^もの^凡果^{くわい}味^{わい}の^希少^{せう}して^亦莫^{もく}く^もむ^を法^{はふ}有^うの^井泉^{せん}
地^ち一^{いっ}切^{せつ}盡^{じん}ん^土地^ち枯^こ涸^{こつ}して^悉く^鹹鹵^ろ一^{いっ}割^{げつ}裂^{れつ}して^く
丘^く冢^ふと^あらん^法山^{せん}も^皆焦^{せう}燼^{ぜん}せん^天然^{ぜん}も^雨と^降さ^む
苗^{めう}稼^かも^皆枯^こ死^し一^{いっ}生^{せい}む^るも^の皆^{みな}く^さ盡^{じん}て^餘も^な
更^{さら}み^せせ^ん士^しと^あらん^一皆^{みな}昏^{こん}闇^{あん}一^{いっ}て^日月^{につげつ}も^以て^以
況^{けい}せ^んに^方皆^{みな}元^{げん}卑^ひして^悉く^法の^愚陽^{やう}と^况せん^も皆^{みな}
業^{ごう}の^道不^ふら^うの^貪賤^{けん}癡^ちの^倍増^{ぞう}して^荒生^{せう}又^{また}母^ぼ又^{また}終^{しゆう}く^是を^は
る^も皆^{みな}樟^{せう}鹿^{ろく}の^ゆく^ららん^荒生^{せう}及^{及び}比^ひ命^{めい}危^き力^{りき}威^い一^{いっ}楽^{らく}
減^{げん}して^人天^{てん}の^樂と^遠離^り一^{いっ}皆^{みな}悉^{しつ}く^愚道^{だう}も^落ん
か^くの^ゆく^の石^{せき}苔^{たい}業^{ごう}の^愚王^{わう}と^愚比^ひ丘^{きゆう}と^我の^法法^{はふ}毀^{かい}
壞^{わい}一^{いっ}天^{てん}人^{にん}の^道と^損減^{げん}せ^ば法^{はふ}天^{てん}皆^{みな}神^{しん}王^{わう}の^荒生^{せう}と^悲
懸^{けん}ま^る者^{もの}皆^{みな}渴^{かつ}魚^{ぎよ}の^玉と^悉く^皆悉^{しつ}く^餘方^{はう}に^むら
る^も已^い上^{じやう}仁^{にん}王^{わう}純^{じゆん}よ^く玉^{ぎよく}古^こ礼^{れい}り^時先^{まう}鬼^き神^{しん}礼^{れい}を^ん
鬼^き神^{しん}礼^{れい}る^がゆ^よ万^{まん}民^{みん}礼^{れい}れ^ん賊^{そく}来^{らい}て^玉と^かま^め
百^{ひやく}姓^{せい}亡^{わう}喪^{さう}一^{いっ}后^{こう}君^{くん}ち^る子^し王^{わう}子^し百^{ひやく}官^{くわん}也^や是^こ非^ひ所^{しよ}生^{せい}じ
天^{てん}地^ち恠^{がい}異^い一^{いっ}二^に十^{じゆ}八^{はつ}宿^{しゆく}星^{せい}の^道日^{にち}月^{げつ}時^{とき}と^悉く^以て^度と^悉く

立正安国論



多く賊起る事ありん亦云く我今入取を以て略か
に二世と入るに一切の玉王皆と去世に六百の佛よつて
しによつて帝王ととる事とほつて是と一切の聖
人羅漢とともあるもこれ彼國土の中に来生して
大利益をなす若王の福はせん時一切の聖人皆
捨去りてとるさん若一切の聖人する時七難必起らん
薬師経云く若刹帝利灌頂王等の災難起ん
時所謂人飢疫疫難他國侵逼難自異叛逆難
星宿變性難日月薄蝕難北時風雨難是時ふ
難ありん仁王經云く大王吾今化する所の百億
の須弥百億の日月一の須弥に天下あり其南閻

浮提十六の大國六百の中國十千の小玉星の衆
散あり其王去の中に七ツのおそくこの難あり
一切王是と難と成故云く何と難と成る日
月夜と成り時吾反逆一或は赤き日出る日お
二之四入の日お或は日蝕光る一或は日滿一重二之に
入る怖小現るは是と一の難と成るあり二十宿
度と成り金星慧星輪星鬼星火星水星風
星刀星南斗北斗入鎮大星一切玉星公星
百官星かくの如くの流星各々に変現せん
これと二の難と成るなり大火國とやき万性燒盡
ん或は鬼火龍火天火山神火人火樹木火賊火く

立正安國論

ス

244977



の如く憂懼するときは七の難とあるあり大
百姓と擧げし時吾反逆し冬あり夏の
冬の時雷電霹靂六月氷霜雹赤水
夏水害水とあり古山石山とあり沙磧石と
あり江河さうさまに流れく山とあり石とあり
の如く憂懼する時とこれ五の難とあるあり
大風万姓と吹殺し國古山河樹木一時は滅没
一時はありざる大風暴風赤風青風天風地風
火風水風の如く憂懼するときは六の難とする
あり天地否古元陽し炎火洞然として百姓
系亢旱し穀みのらむ古地赫燃として百姓

滅盡せんかの如く憂懼する時とこれ六の難とする
あり四方より賊来つて國を侵し内外賊死らん
火賊水賊風賊鬼賊百姓荒乱し刀兵劫起し
の如く懼する時と七の難とあるあり大集終る
云く若國とあつては吾世に在りて施戒慧を修むを
我法の滅せんを以て控て擁護せむんかの如く
する所のを吾の吾根悉皆滅失し其國不尚に
の不祥のりあり一ツは穀とく二ツは兵革と
小の疫病あり一切の吾神悉く是と控離せむを
教令せむ人隨從せど不隣國の爲に侵燒せむ
さん暴火横死起り吾風多く暴水増長して人民を

立正安国論

下



次漂せん内弁の祝戚其々に僕殺せんを主乞うらうに
してまさに重痛にあふべし壽終るの後よ大地獄の中
小生せんるの王のゆく夫人ち子大長城主村を致守
宰官もまじくくくのゆくあふん已夫曰強の文朗あり
万人これ疑えん志多に盲瞽の輩遠惑の人妄に終
統と志んとして心教とを記まむ故小天下世上法佛
流終よ終て控離の心孤生トてこれと擁護の志
ふけん仍る吾神聖人國を捨て不強さるを乞ともつて
魚鬼弁乃実となし強とらしむと客也とほて曰く
後漢の明帝の令人の爰とさうして白馬のやぬへとほさう
上宮を子の守危の逆と殊して寺塔のかまるとるはそれより

このころ上人より下り民小い方を佛像とあがり種卷
とせふに終る時の叡山南苑園城寺に海一列六歳七道仏
経里のどくつなかり堂宇の雲の如く布り終る子の族に
則警政の月氏紀一終動のどくひの亦鷄足れ風氏傳ふ
とれういん一代の交へとさひし一と賣の跡と癢せんとせんや
若し能あふむ委く其故とさくと 主人論して曰く佛
閣覺所つらぬ終終軒とあふむ傍の竹草のゆく侶に
縮麻に似らう崇重年舊るを日にあらうたる但法
昨縮曲よして人倫と迷惑し王后のふ是よして邪
正と記せんるのみに仁王経よ云く法の龜比丘の多く名
利と求て國王を子るの前にたいてみづら破仏法の

立正安国論

二



因縁破土の因縁と説くんをまじりて人びしては経と
法を横に法製と成りて併成よまじりては破佛
破國の因縁とせし上涅槃經よ云く菩薩惡友等終
てん恐怖するものありて惡知識を於ては怖畏の心を
せせよ惡友の爲に殺されては三転にやまむ惡友の爲
に殺されざるは必三転よまじりて上法苑經よ云く惡世の中
の比丘は智慧にしては偏曲あるんはすばし得ざるをばらうと
おもひ我慢の心充滿せん或は阿練若に納衣よして空
閑にあつてみづから眞の道行かふといつて人等を怪賤する
者あるん利善知識を貪着するがゆへは白衣の爲に法を説て
世の爲に恭敬せられんるは通の聲達のゆゑあるんなり

常に大流の中にあつて我れを毀らんとあつまるが如くに
王大に婆羅門居士及びよの比丘流よむらつて能勝て
我れを毀つて是れを殺すの人の道徳の備養とくといふは
劫惡世の中よ多く法の恐怖あるん惡鬼を爲にいつて
我れを毀辱し罵詈訾せん濁世の爲に比丘の方便隨宣
の說法の所とあつて惡口して嘔罵し殺し擯出せん
上涅槃經よ云く我涅槃の後を量百歳に及ぶの衆人
悉くよ涅槃せんは法めつして後像法の申に於て
當に比丘ありて像の律戒たもつよ似ておしく經を
讀誦し飲食臥食嗜して其の長壽せん衆生を
毀辱し之を殺戮するの細目よ見て徐くゆめく

立正安國論



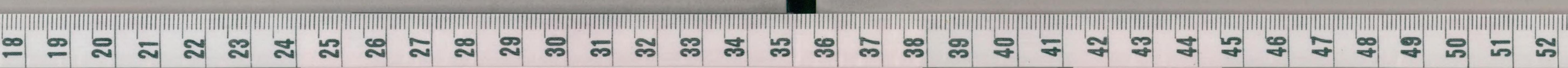
猫の氣がうらぶがやくなれん者には是言はるる我
羅漢と得うと弁に賢者現ト肉を食へば
いづらん啞法と文の婆羅門のやく實は沙つあふ
びして沙門の像と現ト物見熾盛ふして正法と泥
滂せん上文は純て世に依るに依らばもつて純あり愚信を
いさしめむんば豈若るんや 客從憤て曰く明王
天地より化をり一聖人の理也とさるして世に治む
世上の傍侶は天下のゆるあかり愚信を捨てて明王志ん
むべしは聖人あふむんば賢哲作ぐべし今賢聖の
言重なるは依て則ち純義の怪なるは若る何ぞ志ん
何なるてあるらる 泥滂とるん誰人かもつてう愚比丘と

いんや委細くすえんとつとま 主人の曰く後
多の院の正字に法慈とて者あり選擇集を
つる則ち一代の聖教と破し編く十方の衆生
まよひをも選擇よ云く道律律師聖及淨土の
二門をえて聖道と捨て正しく淨土ふゆまの文
初めく聖道といはれは法いてニッあり乃至これふ
おんとしてこれをよふにまさき密大及びもちひ実大
とぞんむべし然れば則ち今真云佛ん天を死處
之偏法相地偏捨偏は等の八家の名正しくさる
ありあり曇鸞法師の往生論の巻く云く儀で純
樹菩薩の十住毗婆沙を案して云く菩薩阿



毗跋致はもとむるに二種の道あり一は易経の道
 二は易経の道なりけし中に難経の道といふ即ち
 是聖道門あり易経の道といふ即ち淨土門也
 淨土家の学者先まづいふ言を去る一は
 先より聖道門と學する人ありといふ若し淨土
 門に在りて其志あらば頗く聖道を去る淨土
 為まづ一又云く吾導和尚は難二経とて難
 経を去る一は正しく傳するの文才一は讀誦難
 といふ以上の難経木の性生淨土の経を去る已
 介大小乘取密の法經を去る一は文持讀誦難
 を去る一は讀誦難とるづく中一は難経

坊といふ以上の難経を去る一は除て已介一切乃
 法佛菩薩未及び法の世天等一於て難経を去る
 一は難経を去る一は難経を去る一は難経を去る
 百生の劣候正法捨てかゝる中一は難経を去る
 一は難経を去る一は難経を去る一は難経を去る
 入衆縁の中に始め大般若經六百卷より法華經
 經を去るまで取密の大乗經を去る六百二十七卷
 八百八十三卷あり皆須讀誦大乗の一句を捨てる
 尚く去る一隨化の教より誓く定教門とひづく
 といふもの隨自の後ふの傳て定教門と閑一といふ



謂て以後永く聞ざるハ唯是念佛の二門ありと又云
念仏の行若くあるも之を具足せざるの文記を
そ書経に云く同く經の疏に云く同て云く若解
けふ同於難の人等あり非難見の難とせざる或ハ
別解別法の魚見の人等とこと私に云く又け中ハ
一切の別解別法異學異見未といふ是聖道門と
されあり又又究後浩白の文に云く夫速く生死
とをみれんとあつせば二種の勝法の中に志づく
聖道門と圖て選で淨土門といふ淨土門といふ
とあつせば正報二法の中に志づく法の難法を抛

て選で當り正法はゆき一に上これにつて是法
するに曇鸞道律菩薩の撰經とて聖道淨
土難法易法の書法とて法苑真言觀一代の大
乘六百七十七卷二百八十八卷一切法佛菩薩及
法の世天等法もつて皆聖道難法難法等に於
て或ハ於或ハ同或ハ同或ハ同に字をもつて
多く一切法まよひ別之國の聖僧十方の佛あり
等をもつて皆群賊とあつてあつて聖聖言せしむる
事迫くハ前後の淨土の二法經の唯除又蓮能傍
正法の撰文は皆に遠くハ一代又時の肝心法華
經の才二の著人ふ伝毀傍け經乃至人命捨入

立正安國論

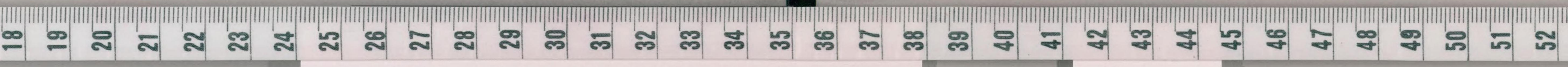


所^あ鼻^び獄^{ごく}の^せ文^{もん}も^まよ^よの^若あり^是も^於て^代來^{だい}代^{だい}
 及^ふび^ん聖^{せい}人^{じん}も^あら^まむ^各異^い衢^ぐも^いつ^てあ^らび^く
 直^ち道^{どう}も^とき^れら^まし^きう^な腫^{しゅ}脹^{ちやう}と^推さ^るる^痛
 下^{しも}古^こ民^{みん}も^あら^まむ^皆經^{きやう}の^海古^この^舟の^經
 佛^{ぶつ}の^海陀^たの^之の^舟の^經も^いつ^てあ^らび^く
 仍^いて^傳來^{くわん}義^ぎ真^{しん}意^い智^ち洗^{せん}等^{とう}或^{ある}は^方里^りの^波濤^{たう}
 と^とら^りて^後を^亦の^聖教^{きやう}或^{ある}は^一般^{ぱん}の^山川^{せん}と^也つ
 て^崇む^る亦^{また}の^佛像^{ざう}若^{しか}し^山の^之を^死ふ^死異^い域^{ぎく}
 達^{たつ}て^仍て^安を^一着^しの^深谷^んの^底に^蓮を^文起^{おこ}
 して^もつ^て崇^とむ^る亦^{また}の^釈迦^{じや}業^{ぎやう}師^しの^光輝^{くわい}も^あら^まむ^各異^い衢^ぐも^いつ^てあ^らび^く

威^いを^現高^{かう}に^施し^て虚^こ空^{くう}地^ち義^ぎの^化を^もつ^て後^ご
 小^{せう}量^{りやう}と^もつ^て故^こに^國を^一郡^{ぐん}郷^{きやう}と^よせ^ても^つて^燈
 燭^{しやく}と^あら^まむ^地の^回園^{えん}と^あら^まむ^もつ^て供^く養^{やう}に^そ
 る^もつ^てに^法然^{ぜん}の^撰擇^{せん}は^依て^則を^もつ^てを^とら^まむ^て
 西^{さい}土^どの^佛陀^たと^いつ^ても^つて^東方^{かう}に^如
 來^{らい}を^爾に^唯に^卷之^{けん}の^經典^{きん}を^あら^まむ^一代^{だい}
 八^{はち}時^じの^妙典^{めう}を^撰擇^{せん}も^つて^法然^{ぜん}の^臺に^あら^まむ^皆
 供^く養^{やう}の^志と^申す^念の^人も^あら^まむ^施の^信
 も^いつ^ても^つて^佛の^圖を^寫し^て瓦^わの^燭り^もつ^て
 老^{らい}ら^うの^佛房^{ぼう}荒^{かう}廢^{はい}して^庭の^志を^くら^ひと
 之^を復^{ふく}舊^{きう}の^心と^もつ^て毎^{まい}に^建之^{けん}の^思ひ^を廢^{はい}は^らむ

立正安国論

十一

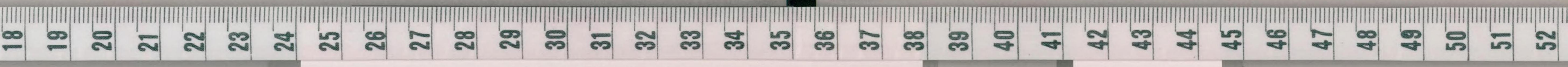


もつて法持の聖傍に於て修むべし僕の時神に去て来
るるは是偏に法然の選擇よりなるなりきき
教十年の百五方の人魔縁よりなりきりて多くは
迷つ傍を好んで正とせざる吾神怒りをさざらんや
圓を捨て偏を好む愚鬼たうとほざらんや彼万行を
せんようのけい一函といふやめんよの志とと 客は
るして曰く我本昨叙迦文淨土の二法を説きしは
末墨齋法匠に法編の講説を捨て一向淨土に歸し
道緯律師の涅槃の廣業を捨て偏に西方の妙業を
ひろめ吾導師和尙の難行を捨て専ら惠心僧の
法經の要文を集めて念仏の一法を宗とし孫陀と貴

を専らする誠く以て修むる又法生の人をいづくを
ぞやるえづく法然上人の知少よして天台山のなり
十七よして六十巻の法流りありびよ八宗を究め具く
大念とほつりき亦一切の經編七遍及靈儀一章疏
傳記看ききりあむといふは智の日月よひく徳の
先師に就くは法りといふは法出離の教に迷て涅槃
樂の肯とての中人は故よあまねく親善くえんが流く
思ひ遠く慮て遂に法經を捨て専ら念佛と修むを正
一考の靈儀と兼てに齋の親疎を弘む故く或は勢
至の化身と号し或は吾導師の再誕と作く然らば則ち十
方の貴賤の別をうるべし

立正安国論

一三



ようこのころと春秋推後り星霜お積り志るるに亦も
 釈尊の文をおごそふして不しひまに孫陀の文をとり
 るんと近年の文をもつて聖代の時深せあるがちに先
 師をそしめて更し聖人を罵るや毛河吹て紙を求め皮を
 奪て血を出し昔の今よあるまでかくの如くの悪云い
 時ひ後文一慎むべし罷業いりて字一科條を争う
 道れん對座於もつて心れあり杖を携て別ちぬらる
 不つまこと主人笑をやめて曰く辛るり我甚多業くるん
 鼻をを濁し鼻よとせざる言ふは於て悪云を思ひ清者を
 捨して聖人と思ひ正脈を疑て悪俗よるをふまき連ひ
 減らふり其罪深き事の記り我夢て委くを説

流ぞ釈尊説法の内一代五時のる先後とつて極
 實をとりて中よ曇鸞道綽普導既よ極くはの
 實証とせざる先よらて後を捨つしむ佛教は淵
 底を探らむんるんづつ法慈を流をめとりとも其
 源を去らば不収いんるとるれば大乗經六百二十と於二
 八百八十之卷あるびに一切の法佛菩薩及び法の世
 等故もつて捨用捨の字を並て一切流生のんところ
 うは是編よ私曲の詞をのべて全く佛經の説をん
 妄語のかり悪口の科いつてもたぐひる一責てもあま
 りあり人皆を妄説を伝ト悪く彼選擇紙つことむ
 故に淨土の之説極はあらて流經を抛て極樂の二佛

立正安国論

十三



て遂に汲てりあり已上これをもつて是を惟に法然
の後多門院の法堂建仁年中の者あり彼院の法
既も暇をあり然る則に大唐に例を採り各
彼河原の汝疑するれ汝恠するれ唯須く
凶を控て吾に帰し深河をさひて根河截べしと
客卿和して曰くいま淵底河をせざれば志づく
手紙をある但し死洛より柳宮に在る迄新門は樞
鍵あり佛家に棟梁あり然れせばいま勤状を遣せ
まじ上奏に及ぶ汝疑するれ汝恠するれ唯須く
其義あり有りを控ていんるん 主人の曰く平少景
ありといふ亦あるも大業河をまるお蒼蠅の驥の尾

法いて万里河後り碧菴の松原に於つて千石の
子一佛のふと生れて法絶の王に法ふまらる何ぞ
法の善徴をいんる情の哀惜河紀さくらんを上
繫經よく云く若者比丘法河中の者をいんて並て呵
責し駈をいんる舉交せざるの當りあるべし是は佛
法の中の然やう若者強遺し呵責し舉交せざる
我より真の聲聞あり余若比丘のふと生れといふ
佛法中の然の責河遺れんが處に唯大綱をとつて粗
一端河志め其上去仁年中延曆興福の友奇
より交り奏を絶初宣濟教をやらせし法然
の選擇の平板河大講堂に在りて世の佛恩河報

立正安国論

十六



せんが爲に是を燒失せしむ法然が墓所は於てい威
神院の大神人子孫付て破却せしむ其門中隆親
聖光成覚薩生等とて遠く配流せしむるを後末
漸勸氣とゆふされざる豈いまも勸化をまいつせんと
いんや 客則和して曰く經をくじ信をそしる事
一人として論じ難し然るに大業經六百二十七卷に
八百八十三卷ありびに一切の法佛菩薩及び法の世
天等をもつて捨因捨縁の正字のまるを廻り勿論
ありを文破然ありけ般僮を守てを洵滂河をを
述ていふり覺て信する賢愚を記すを是非定を
但實難の死り選擇よよるの生燈にを廻りを指し

誠を肯とらんを不冷天下泰平國土安穩の君臣の
祿を所古民の思ふ不なり夫必の法よよつてさう法
の久小依てつとつと國七び人滅せば佛をされり崇むと
法破されり信を去りや先國家破いのつて頌く佛法を
立廢し若實を消し難ん中ずる淋あふばつんと不
つもと 主人の曰く余は是復愚にして賢となせ
唯經文は法いて御不なる河のふ作治淋の旨内弁する
小其文幾多あり具は舉げざるに但佛道いつて
志バく愚業はとらむをよ傍法の人の禁しむるの侶
河おもんせの國中安穩の天下泰平ありん即涅槃經に
云く佛の法よく唯一人河除て餘の一切小施さる皆深歎



まべし純陀問て曰くいんを名て唯一人を除くとまは
 佛の法にけ経の中に況所の如くの破戒あり純陀
 又曰く我今いまだ解せば唯願くは佛に況之
 純陀子況ての法に破戒と一闍提といふ其餘のあ
 由一切小布施せよ皆讚歎まべし大ひる果報は
 純陀又問一闍提とい其我いん佛の法に純陀若比丘及
 比丘尼優婆塞優婆夷あつて麁蕪の河をたつて正法
 を能持せん是を業に造て永く改悔せざるは懺悔を
 んかくの如くの人と名て一闍提道より去るとす若曰
 犯一入逆罪とはくりくり定ての如くの重なるを
 犯すと志れを去るもんにまて怖畏懺悔ありあて復

もせば彼正法に於て永く復惜建立の心を毀替怪賤
 ていよく過咎たふんかくの如くの人を示教の一闍提
 乃とあづく唯かくの如くの一闍提の業を捨てて餘の者
 絶さば一切懺歎せん又云く我性昔をかりに闍提に於て
 大國の王とありき名河仙縁といふ大業經典を念念教
 示するにそん純音ふして麁蕪嫉妬有るは吾男子我
 時を於てんに大業とれもんむ婆羅門の方等と能持す
 りとまき一闍提て即時に吾命招とら吾男子是因縁
 ともつて是より以來地獄に墮む又云く如來昔國王
 とあつて菩薩の道に於ける時ふそくかくの婆羅門
 の命を斃絶し又云く殺ふとあり謂く下中上なる



下へ業のふみい一切の畜生なり唯菩薩示現生の
者とば除く下殺の因縁はもつて地獄畜生餓鬼は
隨具よ下の若しみだ文る何をもつての由にこの法乃
畜生小徴音根あり是故は殺を若し具は罪報と交ん
中殺といん夫の人より阿那含よりまで是を名て中
とも是業因ともつて地獄畜生餓鬼よおつ具小中の若
しみをうけん上殺とい父母あり阿羅漢辟支佛畢
定菩薩摩訶薩あり阿鼻大地獄の中におつべし若し
若し一闍提と殺をりあらん者へ則け之後の殺中
よおちて吾男子彼法の婆羅門等へ一切皆是一闍
提あり上仁王経よ云く佛波斯匿王に若し若し是故

徳の國王よ付屬して比丘比丘尼よ付屬せば何をして
の由に王の威力ありればあり涅槃終ふ云く今と上正
法はもつて法の王大臣宰相及びに於の流に付屬は
正法と毀らん者とば王若大臣に於の流高に若し若し
べし又云く佛の若し若し迦葉よく正法と護持する因縁
ともつての由にこの令別身成然するもとゆえ吾
男子正法は護持する若し入戒と交され威儀も修せ
されまきにの紐弓若し若し樂と持べし又云く若し若し
交持するもつある若し若し若し若し若し若し若し若し
さうかう入戒と交され正法とまもるもつ若し若し若し
大家とるづく正法と護りる若し若し若し若し若し若し若し



まづ一カ杖ヲ持として我是等ヲ説いて名て持戒といふん又云く吾男もよまの世にけ拘尸那城に於て仏の出世しよるまに於て在場蓋如来と号して佛涅槃の後正法世に於ては量億歳ありあまりのに十年に佛法いせりせりきその時一人の持戒の比丘あり名て覺徳といふ其時に多く破戒の比丘あり是從其の時に於て皆惡ん所生トカ杖と執持して是法師と逼む是時國王あり名て有徳といふ是をとききまてに護法の爲の由にまゐりて佛法者の中に於て是破戒の徳の悪比丘と極て其の我闘を其時に説法者危害とまぬるるを治

つり王を時と於てにカ杖ヲ持して我是等ヲ説いて名て持戒といふん又云く吾男もよまの世にけ拘尸那城に於て仏の出世しよるまに於て在場蓋如来と号して佛涅槃の後正法世に於ては量億歳ありあまりのに十年に佛法いせりせりきその時一人の持戒の比丘あり名て覺徳といふ其時に多く破戒の比丘あり是從其の時に於て皆惡ん所生トカ杖と執持して是法師と逼む是時國王あり名て有徳といふ是をとききまてに護法の爲の由にまゐりて佛法者の中に於て是破戒の徳の悪比丘と極て其の我闘を其時に説法者危害とまぬるるを治

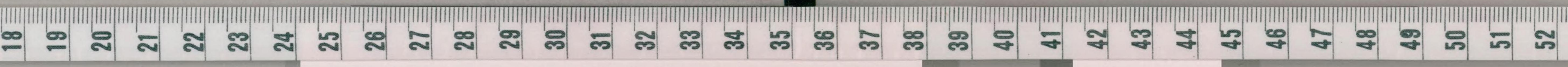
立正安国論

二二



佛の玉に往生をまゐるる子孫はて彼佛の爲に壽
聞流の中の第二の才子となる若し法滅盡せん
と云つたる時あらば當はかくの如く文持擁護を
べし迦葉を時玉の則ち我を是なり悦法の
比丘の迦葉佛をかりて迦葉正法を護らん者ハ
かくの如く等のをその果報と爲ん是因縁とも
つて我今日も於て種々相と得てもつてみづら
莊嚴し法不可壊を成就を佛迦葉菩薩不
若若く是故正法を護りる優婆塞等いまさるに刀
杖と執持してかくの如く擁護まじり吾男子我
樂の後濁悪の世に國土荒れ一粟に相抄掠し人

民飢饉せん其時多く飢饉の爲の故に發心出
家するものありんかくの如くの人を名て禿人と
禿人の業正法を護持するをんて駈逐してあさめ
着の教し着の害せん是故我今持戒の人にせ
て徳の白衣の杖をもつ若し若しをもつて伴
とん杖と持とりて我を等と説て名て持戒と
し杖をもつとりて命とらへん法華經よ
云く若し人信せしめては經を毀傷せば即一切世間
の佛種滅するありといへん命を捨して阿鼻獄よ
いん夫經文取能なり私の廻るんぞくハん正法
死經の如くんが大家經典とそる若し正法の入道よ



勝れざる由に所鼻大城におちて永く出る終ぬし
涅槃經の如くんたとい入蓮の供と併せたる傍法
の施しとゆらさる儀子を殺さ者らるらば之悪道
不落る傍法といましむ者ハ定まつて不退の後
小毘る所謂覺徳ハ是迦葉佛あり有徳ハ則ち
釈迦文あり法華涅槃の經教ハ一代六時の肝心
ありそいすし実におもしれり傳作せざるん
や猶るに傍法の族正道の人とすれ新法慈か
選擇よりして亦愚癡の盲瞽とすれこれともつ
て或ハ彼邊教よりして本盡の儀或ハわたり或ハ
其妄説とまんして禁之の模又彫て海内ふこれ

とひろめ墮弁に是と説小作くわハ則ち家風あり
施まわハ則其門牙あり猶るる或ハ釈迦の指と
きつて鉢陀の乍相と結をせ或ハ東方如來の唐字
と改めて西土教との稱とを居或ハ百餘廻の如
法經をやめて西方淨土の之經經なる一或ハ天を
大座講と停て吾導講とるにかくの如くの群
類を減く畫しは是破法よあらむや或ハ破法
よあらむや或ハ破法よあらむやけ彩華則選擇よ
よるなりあらむは或ハ如來滅滯の禁云よ皆く
るあはれあらむは若く若く若く若く若く若く若く
く天下の靜謐と思は須く國中の傍法とらむと



客の曰く若傍法の業と断し若佛禁の遠を絶せば
彼經文の如く斬罪はひくべき若佛らば殺害お加
へば罪業いんげせんや則大集經云く罪と邪妄
と忌せば持戒及び毀戒天人彼と作喜まべし則これ
我に作喜するにんぬれ我も有り若うれと極お
まことある則はれ我もとうつあり若うれと罵あり
辱むる則これ我と毀辱まらるるのたよりありぬ吾惡
所痛むる是罪と志むるなく傍侶するに於て作喜
とのぶべしんぞそるに作辱しめば亦もそを悲哀
せん彼作杖が目連尊者と害せしや永くはるの處は
況む地婆達多の蓮花比丘尼と教せしや之しく

阿鼻の爐は嗚小先使これあり後毘室も之と
傍法を滅するに似て脱は佛云と破るけるはトは
いんげんぬん 主人の曰く客あきつるに經文をえ
て於るのこばとるんぬのおよばざりるにの通せざるを
く佛子と禁むるおあはれは編は傍法とよくむ
あり支那迦の以前の佛教はを罪とさるとりて
能仁の以後の經説は則を施し我とむ能れは則
に海万邦一切に流其魚は施さばして皆け言に故
せばいちらる能らるひ死りいちらる突り競ひあふ
と客則席に避て襟に刷て曰く佛教これ匡
にして名額竊竊く不審端多くして死能めらる

立正安国論

二十一



あつた但法慈上人の選擇現よいかのあり法以法經
依菩薩法天等以もつて持阿闍伽と裁るるを又
既猶ありらによつて聖人の國とさる吾人の取と持
て天下飢渴一世上疫病以今も人廣く經文を引
て明らうに現兆と志め以故又妄執既不難り耳目
志べく朗あり不冷國土泰平天下安隱一人より万
民よあまを好む不あり終ふ不ありみく一圍捲
の施しをやめて永く流傳尼の供とす一佛海の
白浪とれさめて法山の綠林と裁ん世は我農の世と
あり國は唐虞の玉とあらん猶しと後よ法水は清
涼と靜酌しと佛家の棟梁如崇室せんといへん

悦んで曰く鳩化して鸞とあり雀愛して蛤とあ
るはよろこばしひ哉汝蘭室の友とすドころて麻
畝の性とある穢しを難と顧てつらけ言と伝せ
ば風やうきと浪静くよして不日よ豊はあらんを
但一人の心の時小隨て移りおの性の境よよつと
改まるゆゑに於水中の月波と動き陣幕の軍の
紐よみびくうぬし汝尚元の伝むとりて後よ
定めて永くとすきん若先國古と安んとて現
尚といのらんとつせは速よ情慮とせらして急て
對治以怨よ不似いん業昨經の七難の内又難
忽よ起り二難於汝まういとゆり他國侵逼難自

立正安國論

二十一



異教逆難あり大集經の二実の内二実子駭れ
一実いすど紀らびいこゆるを革実あり金剛明經
の内經の二実過一に紀るとりて他方の怨賊國內
を侵擄はけ実いすどあらんむけ難いすどあらん
仁王經の七難の内六難今盛ふして一難いすど現
せはいすゆるに方の賊來つて國を侵の難あり志うのそ
ありに國土亂る時先鬼神亂る鬼神亂りてあは
万民亂る今け文は流して具にるの情と業あるふ
百鬼あく亂れ万民多く亡ぶ先難先難はあきなり
後実るんぞ疑がらん若し若しの難画法の科よよ
つてあらび紀り競ひ來ぶを時いんうせんや帝王の

國家を基として天下を治め人良の田園を領して
世上所保つ志るに他方の賊來つて其國を侵逼し
て自異教逆して其地を掠領せん豈發るうせん
や豈強がざらんや國を失ひ家を滅していづれのお
より世と遺れん汝須く一女の安堵と思ひ先四表
の靜澄と集るべき者らるんづく人の世にあつては
各後生を恐る是ともつて或は物なむとまんト
或は濟法とつとて各是非子逐ふりうむと
りてありも程あるんで佛法はゆに何ぞある
トき信んのかともつて妄子邪業の烟とらうとま
んや若執ん難さる亦曲意程ぞんせらふく有るの



郷を辭して必^すなるの獄^くおちん^ん不^ふ以^いいん^ん大^{だい}集^{じつ}
 經^{きやう}よ云^いく若^{じやく}國王^{こわう}あつてを^を辱^{じやく}せに^に於^おて施^せ戒^{かい}慧^ゑを
 候^{たう}ま^ま我^が法^{ぽう}のめつまる^{まる}と^とんて^{んて}捨^すて擁^{よう}護^ごせむん^んが
 か^かくの如^{ごと}く經^{きやう}不^ふの^のを^を辱^{じやく}の^の音^{おん}根^{こん}悉^{しつ}く^く皆^い滅^{めつ}失^{しつ}せん^んな
 い^い其^{その}王^{わう}之^の一^{いつ}に^に當^{たう}に^にを^を病^{びやう}にあ^あふべ^べ毒^{どく}
 後^{のち}の^の後^ご大^{だい}地^ぢ獄^{ごく}の中^{ちゆう}に^に生^ません^ん王^{わう}の^の如^{ごと}く^く夫^ふ人^{にん}を^を子^こ大^{だい}臣^{しん}
 城^{ぢやう}主^{しゆ}村^{むら}を^を邪^{じやく}主^{しゆ}宰^{さい}友^{ゆう}も^もま^まつ^つか^かくの^の如^{ごと}く^くあ^あん^ん仁^{にん}王^{わう}
 經^{きやう}よ云^いく人^{ひと}佛^{ぶつ}友^{ゆう}と^とや^やが^がら^らい^い又^{また}孝^{かう}子^こを^をく^く去^き親^{しん}ふ^ふ知^ちよ
 して天^{てん}紳^{しん}た^たす^すけ^けむ疾^{しやく}疫^{えき}鬼^き見^みに^に來^きつ^つて^て侵^{しん}害^{がい}
 突^{さい}恠^{ざい}首^{しゆ}尾^びは^は禍^{わざはひ}と^と連^{れん}ぬ^ぬる^るも^も縦^{じゆう}横^{ごう}よ^よして^{して}死^しして^{して}地^ぢ
 獄^{ごく}鐵^{てつ}鬼^き畜^{ちゆう}生^{せい}ふ^ふい^いん^ん若^{じやく}出^{しゅつ}て^て人^{にん}と^とあ^あら^らば^ば兵^{へい}奴^ぬの^の果^{くわい}報^{ほう}よ^よて

郷^{きやう}の^の如^{ごと}く^く累^{らい}の^のど^どく^く人^{にん}の^の夜^よる^るもの^の出^{しゅつ}に^に火^かの^の滅^{めつ}ゆ^ゆん^ん法^{ぽう}は
 そ^そん^んむ^むる^るう^うど^どく^く之^の界^{かい}の^の果^{くわい}報^{ほう}又^{また}く^くの^の如^{ごと}く^くあ^あん^ん法^{ぽう}死^し
 經^{きやう}第^{だい}二^にふ^ふ云^いく若^{じやく}人^{にん}不^ふ任^{にん}して^{して}け^け經^{きやう}河^か毀^き傍^{ぼう}せ^せば^ば乃^{なん}に^に
 其^{その}人^{にん}命^{めい}終^{しゆう}して^{して}阿^あ鼻^び獄^{ごく}に^にい^いん^ん又^{また}同^{どう}く^く身^み七^{しち}卷^{くわん}不^ふ悔^{かい}不^ふ
 み^み云^いく^く如^{ごと}く^く阿^あ鼻^び地^ぢ獄^{ごく}に^に於^おて^て大^{だい}苦^く惱^{のう}と^と交^{かう}り^りん^んと^と涅^{ねつ}槃^{ぱん}
 經^{きやう}よ云^いく吾^わ友^{ゆう}と^と遠^{えん}離^りして^{して}正^{せい}法^{ぽう}と^と交^{かう}り^りん^んと^と涅^{ねつ}槃^{ぱん}
 其^{その}者^{しや}是^{この}因^{いん}縁^{えん}の^の由^ゆに^に沉^{ちん}没^{ぼつ}して^{して}阿^あ鼻^び地^ぢ獄^{ごく}に^にあ^あつ^つて^て
 交^{かう}り^りん^んの^の身^み形^{けい}ハ^ハ縦^{じゆう}横^{ごう}八^{はち}方^{ぽう}に^に千^{せん}由^ゆ自^じを^をん^ん度^どく^く航^{かう}經^{きやう}と
 ひ^ひふ^ふく^くに^にあ^あら^らは^は法^{ぽう}を^をあ^あも^も一^{いつ}と^とあ^あら^らま^まひ^ひ式^{しき}皆^い正^{せい}法^{ぽう}の
 門^{もん}を^を出^いて^て汚^けく^く邪^{じやく}法^{ぽう}の^の獄^{ごく}に^に入^いる^る悪^{あく}あ^あら^らま^まる^る各^{おの}各^{おの}悪^{あく}友^{ゆう}の^の網^{あみ}
 よ^よか^かつ^つて^て鎮^{ちん}不^ふ傍^{ぼう}友^{ゆう}の^の網^{あみ}よ^よま^まと^とあ^あら^らま^まけ^け朦^{もう}を^を務^むの^の迷^{まい}ひ^ひ彼^か



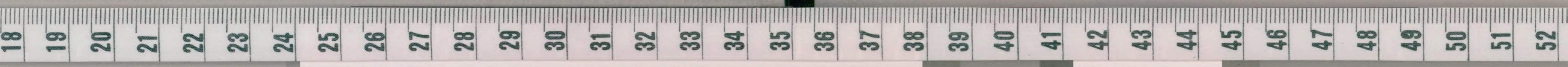
聖徳の座に沈んでんと言ひ慈ひさるんや豈るも一まざ
らんや汝もく信作のすん改て速小宮繁の一言に
拘せよ然る則の二畧皆佛ふなり佛國をれおとろ
んや十方悉く寶土なり寶土をんぞおぶれんや國ふ
妻徹多く士小破壊るんば身は是安念の禪定
あるんけ廻け言えんぞく一あむべしと 客の田今
生後生されう慎ざんされう忘れざんけ經文をひ
いて具に佛語承りては佛の科いりておもく
毀法の罪徹くす一我一佛を志んとして徳佛と抛
三教經を作で法經を闕く是私曲の思ひもあは
則先達の廻く志るがも十方の徳人すくくくの如く

今世の性心所寄一來生よ阿鼻小おちんす文あ
きつうに理詳あり疑へるに証するの意悔を作
で蓋悪客の癡心と寤に速に對治と志んしてよく
恭平承りし一先生承りやまんとして更に没後を
扶ん唯我の信ざるにあはげ又他の信するとも
戒一のんのみ

文應元年 七月勘之 日蓮
立正安國論 終

立正安國論

二十七



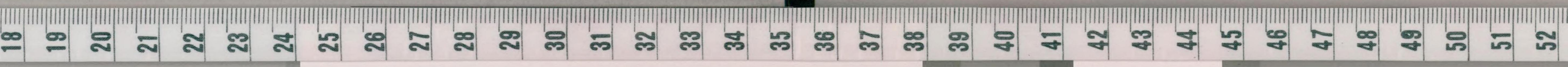
論中或問

或人難とて曰く尔希の経所末段高実と撰みながら
安國論よの尔希の経所引て後文とて多ふの自悟
お遠まるといふやいん 善て曰く此の釈言一代の
聖教大いひまて二ツと一ツと大綱あり二ツと一ツと
あり初に大綱といふ佛及の教あり故佛得道の教とい
唯法苑経斗あり次は綱目といふ法苑の希の結経也
彼法苑の不成佛の教あり故佛得道の文言是を説
とて但名字のくあつてそ實我の法苑経不是也
故に傳教大師決權實論と云く權智不他の唯名

字のくあつて其實義あるのみと云但一權教不
於ても故佛得道の弁ハ説相むるしく多ふに
法苑経の爲の綱目あるが如く而論故佛得道の
大綱ハ法苑経の是とてそ餘りの綱目の流典
不是とありま是くよつて法苑の徒文は是に
引用ひ給ふなり 同て曰く法苑経と大綱とする
徒文いん 善て曰く天台大師の曰く當よある
べしけ経ハ唯如来徒教の大綱を説て綱目と要
細よせ給と云 同て曰く尔希の綱目と云る徒文
いん 善て曰く妙楽の云く皮膚毛線ハ出て流
典よありと云 同て曰く故佛ハ法苑に限りと云

立正安國論

二一八



徒文いん 昔て曰く法苑經に曰く唯一宗法
 を二宗と云と徒法なり 同て曰く亦一宗法
 の為といふ徒文いん 昔て曰く法苑經より
 經の道と云はれしは其の佛宗のあり
 と徒より終る得べきあり 或人又同法
 の正法の法苑經に當るに豈安國論に法苑經
 等を能得と云とあげや 昔て曰く選擇集小
 一切の大宗小宗法佛菩薩法天等を授け
 抛と云ふは經の阿含經の之を經の弁に廢せん
 と云佛のあみごの之を經の弁に一切法佛を廢せん
 と云るは選擇集の非と云ふせんが爲に暫く念

佛宗の弁の法宗をこまけ並て法熱一人があや
 かりと云ふせんが爲に暫く法苑真云等法能
 得と云書たり終る是と云てつとやなり
 棄てつと法の法苑の弁の亦經を建てる宗旨
 法苑經の之を得道するゆゑに法宗を得る隨地
 法苑一人の法佛と云ふさせまふが法を云なり
 唯一宗法を二宗と云は是なり 故に祖書十九卷
 之に抄く依法前の法問ハ佛の亦經と云はせ
 授けしう爰法に於ては安國論に於ては
 法熱が佛を佛の之と責法して餘宗ハハ
 せと云得べきあり 尚世といつてハ日本國中

三十一

三十一



立正安國論

題目と系佛との二ツより知る一真云亡國律を
賊彈云魔杯も皆系佛門一なるれいつてま云律
律等の教一はもとれて唯修念佛の法然が門
流とるまきり故に唯系佛をとり得べきなり
け書紀見の人若く得遠もあらんとい或問と後
一に後一おんぬ

寶曆十二年

十一月冬至

扶桑真人

本爺彦右衛門述

嘉永七年寅年十一月再刻

日蓮大菩薩御書目次

鎌倉殿中間答

一立正安國論

ひつらみち
一冊

一法華坐鋪談儀

同
一冊

一法華開目抄

同
二冊

一念佛無間地獄抄

同
一冊

一觀心本尊抄

同
一冊

一甲州小室山伏問答

同
一冊

一法華題目抄

同
一冊

一御義口傳抄

同
一冊

一御祈禱抄

同
一冊

一日蓮御一代實記

同
一冊

一身延山御書

同
一冊

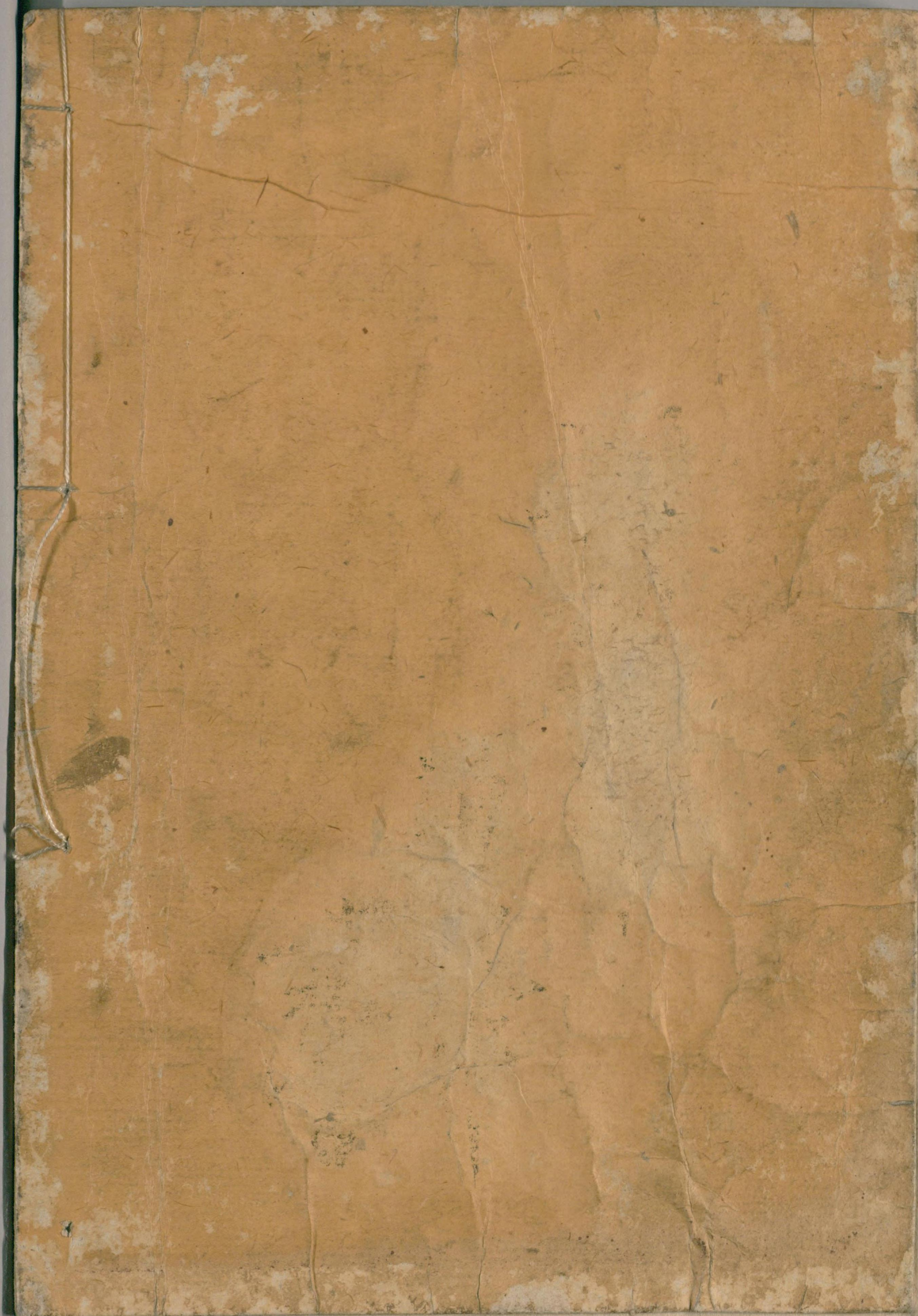
一法華宗門書物數品

一如説修行抄

同
一冊

東都書肆





国立国会図書館 タイトル『立正安国論』 請求記号 188.9-N862r

ガラス使用